

2020/1/10

(英語教育に関する文科省への提言 その3 修正版)

「ひらがな、カタカナ各50文字。漢字が2000文字超。おまけに音訓読みに謙譲語、丁寧語、尊敬語まで合わせると一体いくつあるのか想像もつかないような日本語を、話し、書き、読めるだけでも日本人は、スゴイ！！おまけにあの技術力と震災時にも、配給の順番を待つ礼儀正しさ」

とわが国民の計り知れぬ能力に驚嘆の意を隠そうともしない在日外国人さんから見ると

「なんで、英語みたいなのに26文字しかない簡単な言葉をしゃべれないのか？しかも中学3年間も習っているのに。高校まで入れると6年間もなっているし、大学まで含めると10年間も勉強しているのに、なんで？」

と疑問を抱くのも当然と言えば当然でしょう。

で、在日外国人さんが思いついたのが

「英語が嫌いなのよ」とか

「フランス人と一緒に、日本語だけが格式の高い言語で、英語みたいにお粗末な言語なんかしゃべりたくないというプライドからだろう」

等々、勝手な想像をしているようです。

中には「外国人が嫌いだから」とか、話しかけるとそそくさと逃げ出すのを見て「多分、対人恐怖症の国民性かもしれない」と心理学を持ち出す人まで現れる始末。

しかし、どの説をとってみても、どうも今一つピンときていない様子。

思うに、これは日本人だけが気づいていない事柄で、むしろ外国人さんがおぼろげながらも、うっすらと感じているように「これは日本人の能力に由来する問題では全くない」というのが、話せない原因の糸口を見つけるのに有効な手懸りになると思っております。

ところが我が国の英語教育では、それとは裏腹に「能力」アップにのみ教育のポイントが集まり、逆にそれがますます話せない原因を生み出しているような気がしてなりません。

簡単に言うと「余りに初っ端から、とっかかりのレベルを上げすぎ、且つ正解は一つしかないと思込ませ、更にはそれを一点間違ふことなく、制限時間内に、しかもあろうことか「美的であるように解を出させよう」と絶望的無理難題をこれが世界標準とばかりに押し付けるあまり、それが強迫観念（或いは脅迫観念）、平たく言えば「恐怖」を巻き起こさせ「最初の一言を話そうにも、そもそもの、第一声が出なくなっている」だけなのではないかと。

(続きあり)

(前記事の続き)

2020/1/10

(英語教育に関する文科省への提言 その3 修正版)

一方、英語は、単にコミュニケーションのための「道具」にしか過ぎないので、前回、その2の記事で申し上げたような、ステータスやインテリジェンス、はたまた格式など、あろうはずがありません。

缶を開けるのに缶切りがいる。缶切りにステータスがありますでしょうか？

水を飲むのにコップを使う。コップにインテリジェンスの象徴を見ることがありますでしょうか？

そもそも、英語は道具でしかなく、しかもほとんど日用品に近いものなので、コミュニケーションをとる道具として、いくらでも代用が利きます。数字や図表や絵やジェスチャーなどで。

「唯一の解」や「美的格式」など、どこにもありはしませんし、あると却って邪魔になるだけです。

わが国民は、どうしてこの「いつも身の回りにあって、あまり気に留めることもなく毎日使う日用品」に、こうもいろんな重たいものをごてごてと背負わせてしまったのでしょうか。

まさか「缶を開けるだけの缶切りに畏敬と畏怖を感じ、腫れ物にでも触るかのように恐る恐る接し」ていようとは、夢にもおもっていない在日外国人さん達に、この「恐怖の存在」は到底理解してもらえません。

「What? What? What? Why? Why? Why?」

学習者全員に一貫して、初っ端から外交的国際会議レベルの英語を強要するのは、「学習阻害要因」即ち「障壁」をどんどん高くしているようなものです。

却って逆効果です。

この思いもよらぬ阻害原因を省くためには、英語を「自分の手垢でまみれさせる」やり方が一番なのではないかと自分は考えております。

「たくさん失敗してぐちゃぐちゃになるまでやっごらん。かっごは気にしなくていいからね。間違ったっていいんだよ。何度でもやり直せばいいだけなんだから。気にしなくていいから、どんどんやっごらんよ」

くらいでいいのではないかと。